



研究者名※	北村暁夫	学位※	文学修士
所属※	文学部 史学科	職名※	教授
連絡先	kitamura@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0185072		
研究分野※	イタリア近現代史・ヨーロッパ移民史		
研究キーワード※	歴史学 近現代史 ヨーロッパ イタリア 移民		
共同研究・競争的 資金等の研究課題	<p>研究代表者として</p> <p>基盤研究 (B)、2019年度 - 2022年度 (継続中)、「近現代ヨーロッパの強制移住者の生存戦略とネットワーク形成に関する比較史研究」、16,770千円。</p> <p>基盤研究 (B)、2015年度 - 2018年度、「近代ヨーロッパを中心とする女性の空間的移動とジェンダーの変容に関する比較史研究」、15,600千円。</p> <p>基盤研究 (B)、2011年度 - 2014年度、「近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実態と移動の論理に関する比較史研究」、14,100千円。</p> <p>基盤研究 (C)、2008年度 - 2010年度、「戦間期フランスにおけるイタリア人政治亡命者のネットワーク形成に関する研究」、2,500千円。</p> <p>基盤研究 (C)、2005年度 - 2006年度、「イタリアの「国民国家」形成過程における制度の社会に関する総合的研究」、2,300千円。</p> <p>基盤研究 (C)、2003 - 2004年度、「イタリアからフランスに向かった政治亡命者と移民の生活世界をめぐる歴史研究」、2,200千円。</p> <p>基盤研究 (C)、1999年度 - 2000年度、「イタリア移民と移民受け入れ社会との文化的摩擦に関する比較史的考察」、研究代表者、2,300千円。</p> <p>奨励研究 (A)、1995年度「北東イタリア・アルプス地域における移民行動の歴史研究」、1,000千円</p> <p>研究分担者として</p> <p>基盤研究 (B)、「ブラジルにおける各国移民の非同化適応戦略とトランスナショナリティに関する比較研究」、研究代表者：丸山浩明、2018年度 - 2023年度 (継続中)、16,250千円</p> <p>基盤研究 (B)、「ヨーロッパにおける地霊論の系譜と記憶の積層化に関する宗教社会史研究」、研究代表者：立石博高、2017年度 - 2021年度、16,770千円。</p> <p>基盤研究 (A)、「歴史認識の変容と文化遺産・景観の思想に関する比較研究」、研究代表者：立石博高、2011 - 2015年度、41,860千円。</p> <p>基盤研究 (B)、「ヨーロッパにおける宗教的・密儀的な団体・結社に関する比較社会史的研究」、研究代表者：深沢克己、2005年度 - 2007年度、16,740千円。</p>		
社会貢献・産学官 連携活動等	<p>史学会編集委員 (2008年度 - 2011年度)、公益財団法人史学会理事 (2012年度 - 2013年度)・評議員 (2016年度 - 継続中)</p> <p>歴史学研究会委員 (1993年度 - 1994年度、2005年度 - 2006年度 (2005年度：研究部長)、2018年度 - 2020年度 (会誌『歴史学研究』編集長))</p> <p>『日伊文化研究』(公益財団法人日伊協会)編集委員 (2016年度 - 継続中)</p> <p>朝日カルチャーセンター講師 (新宿：2003年、2005年、2009年、2010年、横浜：2014年度 - 継続中)</p> <p>NHK文化センター講師 (青山：2004年、2005年、2008年 - 2010年、2012年、2013年、2015年、2016年)</p> <p>川崎市民アカデミー講師 (1994年、2017年 (コーディネーター))</p>		
受賞歴	1998年10月：第7回ピーコ・デッラ・ミランドラ賞 (イタリア文化会館)		

研究領域	歴史学	(SDGs)
研究テーマ※	近現代イタリアからヨーロッパや南北アメリカに移動した人々の生活世界	

<p>概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)</p>	<p>【研究の背景・目的・内容】 近年のグローバル化の進展により、人の空間的な移動は世界的なレベルでますます激しさを増している。だが、人の移動は人類の歴史とともに存在するものであり、時代や地域による差異に留意して理解する必要がある。本研究は、産業化・都市化の進展とともに人の移動が活発化した19世紀～20世紀のヨーロッパ、とりわけその中でも移民や政治亡命者として膨大な人々を国外に送り出したイタリアを主たる対象として、イタリアからヨーロッパ諸国や南北アメリカなどに移動した人々が作り出すネットワークと、移動によるナショナル・アイデンティティやジェンダー規範の変容について考察するものである。とくに近年は、イタリアから南北アメリカに向かった女性移民におけるジェンダー規範の変容、第二次世界大戦末期から終戦直後にかけてイストリア半島やダルマチアから追放された、ないし自ら避難したイタリア系住民が戦後のイタリア社会に統合されていく過程、および、ヨーロッパ系や日系の移民が多数入植したブラジル南部におけるイタリア系住民の生活世界といったテーマを中心に研究を行っている。</p> <p>【応用例、研究の展望】 第二次世界大戦末期から終戦直後にかけてイストリア半島やダルマチアから追放された、ないし自ら避難したイタリア系住民に関する研究については、戦後にローマ郊外に定住した人々の定住に至るまでの移動の過程や、定住後の生活世界の変容、政治意識の変容などについて、フィールドワークを中心とした研究を行う予定である。新型コロナウイルスCovid-19の世界的感染拡大により、現地に赴くことが困難な状況が続いたため、研究はいまだ十分に進展していないが、フィールドワークを行うことができれば、大きく進展することが期待できる。</p> <p>【研究方法の特色】 送り出し国と受け入れ国の双方における移民政策や難民・亡命者政策を踏まえつつも、移民や難民、政治亡命者自身に焦点をあて、彼らの移動戦略を分析している点や、男性移民が数量的に圧倒的優位を占める時期を対象に、女性移民にも光を当て、移民によるジェンダー規範の変容を分析している点に大きな特色がある。</p>
<p>本研究関連 特許・論文等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「1908年シチリア・カラブリア大地震と移動の論理」(北村暁夫・田中ひかる編『近代ヨーロッパと人の移動 ― 植民地・労働・家族・強制』山川出版社、2020年 138-163頁) ・『イタリア史10講』(岩波新書、2019年) ・「イタリアの統一と移民」(小松久男編『歴史の転換期第9巻 1861年 改革と試練の時代』(山川出版社、2018年、212-259頁) ・「世紀末とジョリッティ時代」『第一次世界大戦と戦後危機』(北村暁夫・伊藤武編『近代イタリアの歴史 16世紀から現代まで』ミネルヴァ書房、2012年) ・「流出する民を統治できるのか ― 移民法の制定をめぐる議会と国民国家」(北村暁夫・小谷眞男編『イタリア国民国家の形成 ― 自由主義期の国家と社会』日本経済評論社、2010年) ・「戦間期フランスの亡命イタリア人とフリーメイソン」(深沢克己・桜井万里子編『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史』東京大学出版会、2010年、301-339頁) ・『千のイタリア 多様と豊穡の近代』(NHK出版、2010年)
<p>共同研究・外部機関との連携への期待</p>	<p>・科研費を獲得し、これまで11年間におよぶ共同研究を行ってきた。この間に、国際シンポジウムや日本西洋史学会での小シンポジウムなどを開催し、さまざまな研究者・外部機関との連携をはかってきた。今後もシンポジウムの開催などを通じて、連携をはかっていく。</p>